

学校・家庭・地域が連携する「学府制」で、地域と世界をつなぐ人材育成を支える

群馬県伊勢崎市

群馬県伊勢崎市では、「伊勢崎市の教育」のブランド化を目指し、特に、地域を愛しながら、グローバルに活躍する人材の育成に力を注いでいる。子どもの成長を支えていくために地域全体で教育を行おうと、各中学校区を単位とした「学府制」を導入し、学校・家庭・地域の連携・協働を推進している。

群馬県伊勢崎市 プロフィール

◎群馬県南東部に位置。2005年に、伊勢崎市、赤堀町、東村、境町の4市町村が合併し、現在の形となる。古くから「伊勢崎銘仙」として絹織物等の繊維産業が盛ん。富岡製糸場とともに世界遺産に登録された「田島弥平旧宅」を有する。

人口 約21万4000人 面積 約139km²
市立学校数 小学校23校、中学校11校、中等教育学校1校
児童生徒数 約1万8000人 電話 0270-24-5111(代表)
URL <http://www.city.isesaki.lg.jp/shisei/kyoiku/iinkai/>
(教育委員会)

伊勢崎市教育委員会の施策

ふるさとへの深い愛を持って グローバルに活躍する人材を育む

市の基本方針

歴史・文化資産を生かして 「伊勢崎市の教育」をブランドに

ここ数年、人口が増加傾向にある群馬県伊勢崎市。より魅力的な町づくりに向けて、市長マニフェストの1つに「教育・スポーツ・文化の振興」を掲げ、教育環境の拡充、教育施設の整備に取り組んでいる。徳江基行教育長は、基本方針を次のように語る。

「かねてより、市民から『市の特徴を打ち出してほしい』という声が多く寄せられていました。それに応えるべく、これまでも注力してきた教育を伊勢崎市のブランドとして一層強化しようと、その振興に努めています」

江戸時代、現在の伊勢崎市に重なる地域を治めていた伊勢崎藩は、官民協力の下で郷学こうがくと呼ばれる教育機関を設立し、庶民教育に力を注いで

いた。さらに、世界遺産に登録された「田島弥平旧宅」を始め、市内には多くの文化財がある。それらの歴史・文化資産を生かした教育を展開して、市の独自性を高めようとしている。

特に重視するのが、ローカルとグローバルの視点を併せ持つ「グローバル」な市民の育成だ。地域と世界をつなぐ力を持ち、グローバルな舞台で活躍するためには、何よりも自分自身とふるさとを深く理解し、愛することが原点になると考えている。

さらに、同市の外国人住民比率が5.7%（2017年12月時点）と高く、外国籍の子どもが多いことも、「グローバル」を掲げる背景の1つだ。

「外国籍の子どもの市民性を高める教育にも、力を入れています。多様な背景を持つ子どもたちが共に育つ教育を本市の特徴の1つとし、グローバル社会で活躍する力を育てたいと

考えています」（徳江教育長）

グローバル人材育成に向けて

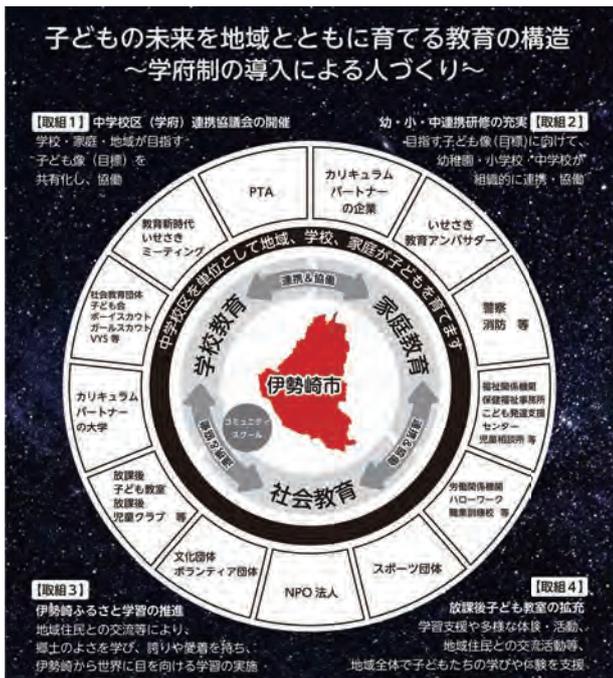
モジュール学習を導入し、 小学校で週4回の英語授業

「グローバル」な市民の育成の一環として、伊勢崎市教育委員会（以下、市教委）では、英語教育とふるさと教育を関連づけた教育活動を充実させている。町田博幸指導主事は、そのねらいを次のように述べる。

「国際化が進む社会で活躍するためには、英語力はもちろん、自己肯定感を高めて、自分やふるさとについて自信を持って話せるようになることが必要です。その目標の1つとして、ふるさとのよさを英語で語れることを掲げています」

同市では、2006年度に研究指定校を設けて英語教育の拡充に努め、2013年度からは文部科学省の教育課程特例校として、全市立小学校で1年生から週1時間の英語の授業を実施してきた。小学校での英語教育が定着するにつれ、課題も明らかになってきたと、町田指導主事は語る。

伊勢崎市が推進する、子どもの未来を地域とともに育てる教育の構造



* 伊勢崎市教育委員会提供資料をそのまま掲載。



教育長 徳江基行 とくえ・もとゆき

大手通信機器メーカーに勤務後、群馬県公立学校教諭、中学校校長、群馬大学教職大学院准教授などを経て、2013年度から現職。

「小学校で英語を積極的に学んでも、中学校に入ると授業の内容や進め方が大きく異なることから、英語学習への自信を失ってしまう子どもの姿が見られました。また、言語学習は短時間でも毎日継続することが大切だと思いますが、週1回の授業ではそれが難しい状況でした」

そこで、2016年度、伊勢崎市教育研究所英語指導研究班において、小・中学校の教員に聞き取り調査を実施。課題を洗い出して改善策を検討した。そして、2017年度、研究指定校の小学校2校で1年生から週2時間の英語の授業を行い、翌年度からその実践を全市立小学校に広げた。

その特徴は、1時間分を1回15分間×3回のモジュール学習とし、週4日は英語に触れられるようにしたことだ。授業は、チャンツやダンスを取り入れたり、他教科とのつながりを持たせたりするなど、合科教育の視点で構成。さらに、小学校で文字の指導を充実させる一方、中学校ではコミュニケーション活動に重点を置くことで、小・中の連続性を高めた。現在、

小・中の教員が協働で小中一貫の英語力向上カリキュラムを作成中だ。

「教員の経験や熱意だけに頼るのではなく、どう指導すれば、どのような力が伸びるのかを体系化することが大切と考え、カリキュラムづくりに取り組んでいます」(徳江教育長)

地域で学んだ地域のよさを英語で表現し、発信する

2014年度から本格化した「伊勢崎ふるさと学習」と英語教育とを関連づけた活動の例は、次の通りだ。

小学校では、生活科や「総合的な学習の時間」などで、市内の文化遺産について地域の人から話を聞いたり、体験学習をしたりして、ふるさとのよさを学ぶ。中学校ではその活動を引き継ぎ、中学2年生で名所旧跡や特産物など、ふるさとの特徴を英語で発表する。さらに、ALTの協力を得て、地域情報を英語で紹介する季刊誌『Impress』を発行。同誌をリーディング学習の素材として活用し、ふるさとへの理解を深めている。また、毎年、中学3年生の希望者70人を対象に行

* ベネッセが提供するスコア型英語4技能検定。



学校教育課指導係長 猪野 泉 いの・いずみ

群馬県公立中学校教諭、伊勢崎市立高校教諭、同市立三郷小学校教頭などを経て、2016年度から現職。



学校教育課教育企画係長 青野和彦 あおの・かずひこ

群馬県公立中学校教諭、伊勢崎市教育委員会管理主事、同市立赤堀東小学校教頭などを経て、2018年度から現職。



学校教育課指導主事 町田博幸 まちだ・ひろゆき

群馬県公立中学校教諭、海外日本人学校教諭、伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校教諭などを経て、2014年度から現職。

うアメリカ・ミズーリ州立大学での語学研修でも、伊勢崎市の魅力について英語で発表する場を設けている。

そうして学習を重ねた英語力を測るため、2018年度、市立中学校の全2年生に「GTEC」*を実施した。

「生徒個々の英語力を測り、生徒自身の学習改善、さらに教員の指導改善に結びつけることがねらいです。企業のノウハウを積極的に活用する

ことで、英語教育を劇的に変えたいという思いもあります。まず本市がそれを実践し、全国に発信していきたいと考えています」(徳江教育長)

地域連携の新しい取り組み

中学校区ごとの「学府制」で地域の結びつきを学びにつなげる

子どもの成長を地域ぐるみで支える枠組みも構築した。市教委は以前からコミュニティ・スクールの運営に力を入れており、2017年度には各中学校区に1校の導入を完了した。その次の段階として構想したのが、中学校区ごとに、幼稚園、小学校、中学校、公民館、企業、大学、NPO法人などの多様な機関が協働する「学府制」だ(P.9図)。各校の校長やPTA会長、各機関の代表者が集まって協議し、学校・家庭・地域で育てたい子ども

像を共有。幼・小・中の連携の強化や「伊勢崎ふるさと学習」の推進など、様々な取り組みを進めている。

学府制は、2018年度に2つの中学校区で試行し、2019年度には全中学校区で導入する計画だ。青野和彦教育企画係長は、次のように話す。

「子どもを取り巻く環境や学校が抱える課題が複雑化・困難化し、社会が総がかりで教育に取り組む必要性を感じています。学府制では、学校や家庭、地域が同じ目線でゆるやかなネットワークを形成し、各地域で子どもの成長を支えることを目指しています」

同市では、中学校区ごとに成人式を行うなど、既に中学校区単位の地域コミュニティが形成されている場面もある。そうした地域基盤を生かして小・中連携を強化すべく、指導主事などの教育行政職員は、中学校区ごとに担当が決まっている。猪野

泉指導係長はこう語る。

「学校教育課はもちろん、生涯学習課や健康教育課の教育行政職員も特定の地域を担当します。おのずと園や学校への訪問回数が多くなり、信頼関係が築かれて、成果や課題の把握がスムーズになります。その体制とコミュニティ・スクールの機能も活用しながら学府ごとの特色を打ち出し、市全体を盛り上げたいと考えています」

今後は、先行導入した2中学校区の実践を全市に広げるとともに、ふるさと学習のさらなる充実を図る。

「自分が育った地域で、その一員として地域社会を支える経験をすることで、学びも地域への思いも深まっていき、市民性が育まれることでしょう。そうした経験や学びを『グローバル』な資質の育成につなげることを目指し、これからも実践を深めていきます」(徳江教育長)

伊勢崎市立宮郷中学校の実践

家庭・地域と課題を共有して教育活動を行い、地域活性化を図る



◎ 1947(昭和22)年設立。「自学・敬愛・錬成」を校訓に、「自ら学び、心豊かで、たくましい生徒」を目指す生徒像に掲げる。2016年度から、伊勢崎市教育委員会「コミュニティ・スクール」研究指定校。

校長 松本明良先生
生徒数 728人
学級数 22学級(うち特別支援学級2)
電話 0270-25-4448
URL <http://www.isesaki-school.ed.jp/miyagouchu/>



校長
松本明良

まつもと・あきら

伊勢崎市立中学校教諭、同市教育委員会指導主事、同市立四ツ葉学園中等教育学校副校長等を経て、2016年度から現職。

「学校運営協議会のメンバーの立場は様々です。だからこそ、協力していくためには、『子どもの人生をより豊かにする』という目標に向けた共通のテーマを決めて、具体的な行動を通して一体感をつくるのが大切だと気づきました。活動を停滞させないために、常に新たなテーマに取り組むことも必要だと感じました」

最初に選んだテーマは、「あいさつ運動」だ。

「あいさつはコミュニケーションの第一歩で、家庭、学校、地域のすべてで大切なことです。立場が違っていてもねらいを理解し、協力しやすい活

地域連携のねらい

あいさつ運動を起点に地域が連携する土壌を耕す

伊勢崎市立宮郷中学校は、2016年度にコミュニティ・スクールとなり、現在は市が掲げる「学府制」の

先行導入校として取り組みを進めている。地域連携は、学校、家庭、地域の関係者から成る学校運営協議会を軸に展開しており、2016年度は、協議を進める中で連携の方向性を明確にしていっていった。松本明良校長はその経緯を次のように述べる。

動だと考えました。生徒にあいさつ
の習慣を身につけさせるだけでなく、
あいさつ運動をきっかけに地域の結
びつきを強め、活性化させることが
最終的な目標でした」(松本校長)

こうして2017年度に、学府制と
して初の本格的な取り組みであるあ
いさつ運動を開始した。学校運営協
議会会長を委員長、宮郷地区社会福
祉協議会会長を副委員長、各校長・
園長やPTA会長などをメンバーとし
た「挨拶運動推進協力委員会」を設
置し、具体的な進め方を話し合った。
それと並行して、同校では、生徒か
ら標語を募集し、美術部員がポスター
を作成。それを学校や集会所に掲示
したり、各家庭に回覧板で呼びかけ
たりして、家庭・地域への周知を図
った。

「いちばん心がけたのは、学校が地
域に一方的に依頼するのではなく、
それぞれが主体的に協働する対等な
関係を築くことです。その結果、地
域の皆さんが積極的になり、教員の
負担が大きくなることはありません
でした。また、地域全体の取り組み
とすることで、教員が異動しても継
続が可能となりました」(松本校長)

それらの活動は、通学時間帯に児
童・生徒が地域住民と町のあちこち
に立つて行う「あいさつ運動の日」
として結実した(写真1)。2018年

度も、多くの地域住民とともに定期
的に実施されている。

地域連携の活動

幼・小・中で生活習慣の基本を 共有、学力向上の土台を築く

学校運営協議会は、宮郷地区の学
力向上策にもかかわっている。例え
ば、校区の全校・園で生活や学習に
関する規律や習慣を統一しようと、
「宮郷地区幼小中一貫生活・学習ル
ール」を作成。発達段階ごとに4期に
分けて具体的な目標を設定し、全校・
園、そして家庭で実践している。

ほかにも、週1回は家族全員で食
事をして、絆を深めることを各家庭
に呼びかけたり、スマートフォンの
使用ルールを共有したりと、教員が
感じていた様々な課題について地域
住民からも積極的に問題提起がなさ
れ、地域全体で取り組んでいる。

あいさつ運動は2019年度をひと
区切りとしていったん終了し、新た
な課題に取り組んでいく。

「学校・家庭・地域の代表が1つの
テーブルを囲み、課題を出し合って
解決に向けて協働する。その第一歩
があいさつ運動でした。今後は、家
庭や地域から提起された様々な課題
に取り組んでいきます」(松本校長)

グローバル人材の育成

小・中が連携し、ふるさと教育 を活用した英語の授業を実施

学府制の導入によって、小中連携
が強化され、その好影響は英語教育
にも表れている。例えば、同校の英
語科教員が小学校の研修に参加した
り、小学校の英語のカリキュラム作成
に協力したりしている。また、小・中
の学習内容の連続性を意識したCAN
-DOリストも作成した。

「これまで、中学校入学後に英語の
学習を早々に諦めてしまう生徒への
対策は、十分とはいえませんでした。
ところが、小学校で元気よく楽しそ
うに英語を話している子どもの姿を
目の当たりにして、多くの教員が『中
学校も変わらねばならない』という
意識を強めました」(松本校長)

カリキュラムの連続性も向上した。
小学校から行われている「伊勢崎ふ
るさと学習」において、中学1年生
で取り組んだ史跡巡りの体験を生か
し、中学2年生では地域の魅力を英
語で伝えるプレゼンテーションを実
施。さらに、その要旨を英語でまと
め、市教委が発行する英語の情報誌
『Impress』に掲載している(写真2)。

「小学生の時からふるさとの様々な
よさを学んできたため、生徒たちの
頭の中には伝えたいことがたくさん
あったからでしょう。プレゼンテー
ションや英作文に、とても意欲的に
取り組んでいました」(松本校長)

同校では、今後も家庭や地域と手
を携え、子どもの未来を見据えた教
育活動をつくり上げていく考えだ。

「本校の学校教育目標は、『未来を
展望し、果敢に挑戦できる宮中生』
です。その目標の通り、自分の未来
を思い描いて前進できる生徒を、地
域とともに育てたいと考えています」
(松本校長)

地域と連携し、地域のよさを学ぶ



写真2 「地域のことを英語で学ぶ」を目的とした『Impress』。宮郷の魅力伝えるコーナーに、同校の生徒が書いた紹介文が掲載された。

写真1 毎月実施するあいさつ運動。推進母体である挨拶運動推進協力委員会は、学校運営協議会とは別に、年3回会合を行っている。

